

大阪人のアイデンティティはなかなか複雑 ユーモアのなかにも、とんがった批判精神

カラフルな綴れ織り壁画《熊野詣出新絵巻》が、JR天王寺駅のコンコースにあったことをご存知だろうか。駅ビルのリニューアルで取り外されたが、熊野古道が平成16(2004)年に世界文化遺産になる約40年前の昭和37(1962)年に完成した。



鍋井克之《行水》1936年
大阪市立美術館蔵

原画を描いたのが、大阪を代表する洋画家・鍋井克之(1888～1969)である。昨年、没後50年の展覧会や展示が、池田歴史民俗資料館や熊野古道なかへち美術館、大阪市立美術館で開催された。

鍋井は西区北堀江に生まれた。9歳で船場に移り、大阪府立天王寺中学校(現・府立天王寺高校、当時は上本町)から東京美術学校(現・東京藝術大学)に進んだ。フランスにも遊学し、大正13(1924)年に小出楯重、黒田重太郎、国枝金三らと信濃橋洋画研究所を設立する。二科会や第二紀会で活躍し、昭和39(1964)年、大阪芸術大学の前身である浪速芸術大学の設立にあたって教授となった。

絵の具を塗りこんで深みある発色を生むことが鍋井の特色である。優れたデッサン力から「デシナツール(素描家)」とされる小出に対して、鍋井は「パントル(画家)」「カラリスト(色彩画家)」とも呼ばれた(乾由明「小出楯重と鍋井克之」1976年の展覧会図録)。

人柄も飄々とし、作品もどことなくとぼけた味わいがある。《行水》(大阪市立美術館蔵)では、回り燈籠の下、たらいで行水する鬻姿の女性を描く。西洋絵画の水浴図が奇妙に和風化している。漱石の『吾輩は猫である』で寒月君が提唱した俳句趣味の「俳劇」のパロディ化に挑んだ感じだろう。

また、誰よりも大阪を愛し、織田作之助の小説の装釘や、大栗裕作曲のオペラ「夫婦善哉」(1957年)では舞台装置制作のため、戦前の法善寺境内を描いている。随筆の名手でもあり、『和服の人』(1934年)『閑中忙人』(1953年)『大阪繁盛記』(1960年)などを刊行した。

私がこだわる随筆集が『大阪ざらい物語』(布井書房、1962年)である。タイトルだけ見ると、大阪が嫌いな人間と勘違いするが、副題に英語で“A Lover of Osaka Grumbles”とある。loverの本来の意味は微妙だが、大阪を愛する人

のつもりだろう。grumbleは、ぶつぶつ不平を言う、ぼやく、を意味し、大阪を愛する人がぼやいている、といったニュアンスである。

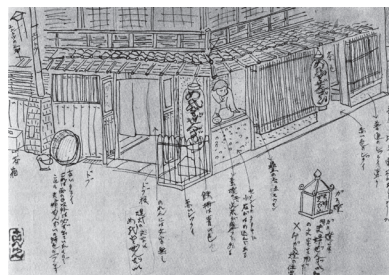
本書で語られる有名な逸話がある。鍋井に絵を学ぶ若旦那のSぼんだが、放蕩が過ぎて勘当された。親に謝るかと思うとさにあらず。翌日、道頓堀の人力車の寄せ場に車夫姿で客待ちをしている。それが街中の噂となって困った実家では、親族会議が招集され、すったもんだの末、浄瑠璃の世話物よろしく母の願いで勘当が解けたという。

この話を館直志こと先代の渋谷天外が脚色し、藤山寛美が主演した松竹新喜劇が、名作「大阪ざらい物語」である、5月の松竹座「藤山寛美没後三十年喜劇特別公演」でも上演されるようだ。

ところで、読者の中にも大阪が大好きだが、鍋井の“大阪ざらい”に共感する人も少なからずおられるのではないかと。 「大阪バンザイ!」「大阪日本一!」と紋切り型に言われると、かえって後へ退いて「ほんまですか?」と眩したくなるタイプである。

谷崎潤一郎の「私の見た大阪及び大阪人」(1932年)はユニークな視点で大阪を評価した名随筆だが、私でも少しこそばく感じるように、鍋井も違和感を覚え、谷崎の発表直後にそれを批判している。

誉められても、いや違うという複雑に入り組んだ精神性こそが、この街の文化的伝統であり、大阪人のアイデンティティであることを鍋井は、“大阪ざらい”という、ややこしいタイトルに託したのではなかろうか。ほんとうに面白い画家である。



オペラのために描いた戦前の法善寺横丁。
鍋井克之「大阪繁盛記」(布井書房、1960年)に掲載

筆者プロフィール

橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学総合学術博物館前館長／大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼殿堂一なにわ 知の巨人」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大大阪イメージ増殖するマンモス/モダン都市の幻像』(創元社)など。